

ユニークな三つの灯台

夜間の船の航行を導く灯台の光は、時にそれを眺める人にとって人生の道標（みちしるべ）のように見えることがあります。そんな未来を照らす灯台が高松市には大小17基もあります。うち、ご紹介する3基は極めて個性的で魅力的です。

まずは、「せとしるべ」の愛称で親しまれるサンポートの高松港玉藻防波堤灯台。ちょうど今年で設置20周年を迎えました。2016年には日本ロマンチスト協会から「恋する灯台」に認定されています。約1600個のガラスブロックでできた世界初のガラスの灯台で、夜間は胴体部分も含めた全体が赤い光を放ち、赤いこけしが優雅にすっと立ち上がっているように見えます。その美しさから夜景鑑定士へのアンケートをもとに選出した「日本三大夜灯台」に「江の島灯台」に次ぐ2位で選出されているそうです。「灯台下（もと）暗し」ならぬ「灯台下（もと）赤し」という何ともロマンチックな灯台です。

二つ目は男木島灯台。設置から約123年の歴史を誇り、昭和32年に公開された映画「喜びも悲しみも幾歳月」の重要な舞台の一つとなりました。灯台本体は地元産庵治石を使用した総御影石造りで、日本では2基しかない地肌のままの無塗装の灯台です。映画では、息子の光太郎が不良とのケンカで刺殺されるという大きな悲しみの場所となりました。それを乗り越えた先には喜びが待っているという展開で、灯台が人生模様を照らす象徴として扱われています。「禍福は糾（あざな）える縄の如し」ならぬ「禍福は点滅する灯明（あかり）の如し」というところでしょうか。

三つ目が女木港鬼ヶ島防波堤灯台です。桃太郎の鬼ヶ島伝説で有名な女木島の玄関口に「せとしるべ」と同時にデザイン灯台として設置されたものです。庵治石の台座の上で周囲を見張っている鬼の姿が石像でリアルに作られています。抱えている棒の先が灯器になっていて、遠見では灯台とはわかりません。鬼の顔は親切的な青鬼君に似て柔和で、島を訪れる人を温かく歓迎してくれています。「鬼に金棒」ならぬ「鬼に灯台」で、強さではなく優しさに溢れています。

来年、4度目となる瀬戸内国際芸術祭がこの地で開催されます。瀬戸の海を照らし出すこれらの灯台が放つ光の先に、明るい地域の未来図が見えてくることを期待したいと思います。